



ロカ岬の夕暮れ

北緯三十八度四十七分、東経九度三十分。

ポルトガルのロカ岬はユーラシア大陸最西端

に位置する。

同じリベリア半島にあるスペインのフィニステレ岬も経度はほとんど変わらないのに、わずかな差で



ロカ岬から大西洋に沈む夕陽

N.0.2である。しかし実際に訪れてみると、ロカ岬が脚光を浴びるのは、経度N.0.1"だけが理由ではないこ

とがよくわかる。首都リスボンから車でわずか四十分余りのところなのに、最果ての岬にふさわしく、絶句するほどの光景を目にすることができると、高い断が、絶壁。ポルトガルの詩人、カモンエスが「地ここに果て、海始まる」と表現したように、陸と海との攻防が目前に展開し、大西洋の水平線が広がる。この水平線に太陽が沈む時が絶景である。

大西洋に沈んでゆく夕陽を見ながら、改めて人生には運、不運があるのだと思った。というのは、今回の南スペイン・ポルトガルの旅は安いツアー。空港に行く、何と七十九人の団体という。現地での移動はバス二台でA、B二つのグループに分かれた。それぞれに添乗員がいる

がバスはいつも満席状態。何日間もバスで移動する場合は二十五人前後ならゆったり旅ができるが、旅慣れた人から「これでは」と不満が出た。何よりもこんな大きな団体になると、行く先々で女性トイレに長い行列ができる。二人の添乗員が話し合い、後半のポルトガルでは二台のバスが同じコースを一緒に走ることはず、一方のバスが午前中のコースを、もう一方が午後とそのコースを走ること。トイレ・ラッシュが多少緩和された。

この結果、私が乗ったバスは、ロカ岬は夕方に見ることができたが、もう一台の方の人たちはロカ岬を午前中に見ることになった。自分たちは幸運にも夕方の美しいロカ岬を見ることができたが、そこを午前中は訪れた人は不運と思ったのである。しかし、これも考え方一つ。午前中には午前中の良さがあつたに違いない。すぐ不平、不満を口にせず、ありのままを受け入れ、賛美と感謝の気持ちを持つことこそ巡礼者の心であろう。とはいえ、大西洋を押し戻すように突き出したロカ岬から見る夕陽は、ただ美しいだけでなく、哀愁が漂う、大自然にしか描き出せない美しさがあつた。そして、いかに人間が微々たる存在であるかを感じさせられ、沈んだあとの風景に、死後の世界のことをふと考えた。



独特な修飾文字の

「ロカ岬訪問証明書」

（元山口放送取締役ラジオ局長）